



Data

監督・脚本：ドン・ユエ(董越)
 出演：ドアン・イーホン(段奕宏)
 /ジャン・イーイエン(江一燕)
 /トウ・ユアン(杜源)
 /チェン・ウェイ(鄭偉)
 /チェン・チュウイー(鄭楚一)

👁️👁️ みどころ

韓国には『殺人の追憶』(03年)をはじめとして、“フィルムノワール”と称される“本格派サスペンス”の名作が多いが、中国では近年の『薄氷の殺人』(14年)しかない。チャン・イーモウ監督もチェン・カイコー監督も未着手だが、若手のドン・ユエ監督がそれに続く中国版本格的サスペンスに挑戦！

中国の司法制度はもちろん、犯罪捜査のあり方も民主主義国の日本や韓国と大きく異なるから、そのあたりの注意が不可欠。しかし、古い国営の製鋼所の工員風情がなぜ、探偵気取りで連続殺人事件の捜査に首を突っ込むの？本作はそんな違和感から出発し、終始重苦しく暗い雰囲気の中で物語が進んでいく。

美女イエンズの登場が救いだが、男女の恋模様の展開も今ドキの若者向け邦画のように単純ではない。また、シャーロック・ホームズ気取りの主人公が模範工員として表彰されるシーンは現実？それとも幻？

舞台は？時代は？そして、原題『暴雪将至』の意味は？そこに込めたドン・ユエ監督の思いは？そんなところまで深読みすればさらに興味深いが、さて、あなたの本作の読み解き方は・・・？



■□ 『薄氷の殺人』に続く中国版本格派サスペンスに注目！ ■□

韓国映画には“フィルムノワール”と称される、殺人事件を巡る“本格派サスペンス”の名作が多い。その筆頭は、『殺人の追憶』(03年)で、これは1986年から91年にかけて現実起こった「華城(ファソン)連続殺人事件」を題材として、捜査に執念を燃やす対照的な個性の2人の刑事と、次々に容疑者とされていく男たちの姿をリアルかつ骨太に描

いた見事な作品だった（『シネマ4』240頁）。韓国では、以降『チェイサー』（08年）（『シネマ22』242頁）、『息もできない』（08年）（『シネマ24』157頁）、『母なる証明』（09年）（『シネマ23』131頁）、『殺人の告白』（12年）（『シネマ31』205頁）等のフィルムノワールの名作が生まれ、さらに韓国の三大未解決事件の1つである「イ・ヒョンホ誘拐殺人事件」を題材にした『悪魔は誰だ（MONTAGE）』（13年）（『シネマ35』58頁）や『殺人の疑惑』（13年）（『シネマ35』73頁）等の名作が誕生している。

しかし、中国では本格的サスペンス映画は少なく、第五世代監督を代表するチャン・イーモウ監督もチェン・カイコー監督もその手の映画は1本も作っていない。また、中国では「裁判モノ」も少なく、せいぜい『再生の朝に—ある裁判官の選択—（透析/Judge）』（09年）（『シネマ34』345頁）や『我が愛にゆれる時（左右/IN LOVE WE TRUST）』（08年）（『シネマ34』350頁）、『ビースト・ストーカー／証人』（08年）（『シネマ34』453頁）、『見えない目撃者（我は証人/The Witness）』（15年）（『シネマ37』190頁）くらいだ。そんな中、中国の新進監督刁亦男（ディアオ・イーナン）が発表した『薄氷の殺人』（14年）は、中国映画には珍しいフミステリー作品で、第64回ベルリン国際映画祭で作品賞と主演男優賞の2冠を獲得した（『シネマ35』65頁）。

それに続くすばらしい中国版フィルムノワール＝本格的サスペンスで、ドン・ユエ監督のデビュー作となった本作は、第30回東京国際映画祭で上映され、最優秀男優賞と芸術貢献賞をW受賞した。さあ、『薄氷の殺人』に続く、中国版本格的サスペンスの面白さは…？

■□■本作に見る連続殺人事件の捜査は？ v s 韓国 v s 日本 ■□■

前述のとおり、韓国映画には犯罪モノの名作が多いから、それらを見ていると“三大未解決事件”と言われている①華城（ファソン）連続殺人事件、②イ・ヒョンホ誘拐殺人事件、③カエル少年事件の異様さがよくわかる。しかし、韓国は日本と仲良くなったり険悪になったりを繰り返しているものの、それでもやはりアメリカと同盟関係にある民主主義の国だから、警察の捜査も刑事裁判のルールもそれなりの民主主義のルールに基づいている。スクリーン上に見る現場の刑事たちの荒々しさ（？）をみれば、日本の民主主義の観点からはかなり違和感があるものの、それでも選挙によって大統領や国会議員を選び三権分立制度を公称する民主主義国であることに変わりはない。しかし、民主主義ではなく、中国共産党による一党独裁制度の国、中国の犯罪捜査や刑事裁判のあり方は？

2018年12月1日に華為技術有限公司の副会長で最高財務責任者を務める孟晩舟がカナダで逮捕されたことを受けて、中国とカナダの中が険悪となり、1月14日には中国遼寧省の大連市中級人民法院（地裁）が麻薬密輸罪に問われたカナダ人男性の差し戻し審で死刑判決を言い渡した。こんな現実を見ていると、前述した中国映画のサスペンスものとは別に、今更ながら中国の犯罪捜査や刑事裁判のあり方が注目される。しかして、本作冒頭に提示される若い女性の連続殺人事件とは？

2019年初春に公開された邦画の『マスカレードホテル』（18年）も、テーマは3件の連続殺人事件だった。しかし、そのストーリーは東野圭吾原作ながら、かなりエンタメ色に富んだ（？）今ドキの邦画のつくりになっていた。しかし、きっと中国映画の本格的サスペンスは違うはず。そう思っていると案の定・・・。

■本作の舞台は？時代は？■

『薄氷の殺人』の舞台は、中国北部の寒村だった。そして、その村にある広大な石炭工場のベルトコンベアで運ばれてくる石炭の中に人骨が混じていたところから物語がスタートした。そして、一貫して暗く陰鬱な雰囲気の中で、“犯人は誰だ？”のミステリーが進行していった。

それに対して、本作の舞台は明示されないが「古い国営製鋼所のある小さな町」と聞けば、それは王兵監督の『鉄西区』3部作（03年）（『シネマ5』369頁）を観ていなくても、きっと中国東北部の町だと推定できる。『鉄西区』は、遼寧省瀋陽にある工業地帯の中心部で、1980年代に繁栄していた重厚長大型の国営企業が衰退していくサマを全9時間05分という長編ドキュメンタリーで表現したが、本作の舞台となる「中南鋼鉄」の工場でも、工員のリストラが進んでいくので、それに注目！

もっとも、本作ラストには1997年に中国南部を襲った記録的な寒波についてのテロップが流れるから、ホントは本作の舞台は中国北部ではないらしい。また、パンフレットにある「ドン・ユエ（監督）、ドアン・イーホン（俳優）東京国際映画祭公式インタビュー」を読むと、最初は本作を中国の西北部で撮る予定だったが、プロデューサーの出身地である南の方の湖南省にロケ地を変更したことがわかる。しかし、それは一体何ため？それも、とにかく雨のシーンが多い本作を観る中で、じっくり考えたい。

■主人公はユイ探偵！彼の捜査への関与は？■

本作の主人公は製鋼所内の泥棒の検挙で実績を上げていたため、“ユエ探偵”と呼ばれている男ユイ・グオウェイ（ドアン・イーホン）。彼は製鋼所の現場ではなく、保安部の警備員をしているためか、『マスカレードホテル』で木村拓哉扮する潜入捜査刑事と同じく“人を見抜く能力”があるらしい。そのため、懇意にしているベテランのジャン警部（トウ・ユアン）からはかわいがられていたが、刑事気取りで事件に首を突っ込むユイを快く思っ

ていないのがリー刑事（チェン・チュウイー）。導入部でユイ探偵は、彼を師匠と慕う保安部の部下リウ（チェン・ウェイ）と共に、3人目の犠牲者となった若い女性の死体を写真に撮ったりしていたが、そもそもこれは韓国や日本ではありえないことだ。

ツイ・ハーク監督の『王朝の陰謀 判事ディーと人体発火怪奇事件』（10年）の主人公は中国版シャーロック・ホームズこと判事ディーだった（『シネマ34』167頁）。そして、

同作では、天才的な推理力を時の皇后・則天武后に見込まれた判事ディーは、人体発火怪奇事件解決の全権を委任されていたが、本作のユイは保安部の警備員のくせに勝手に探偵気取りの活動をしているだけ。したがって、リー刑事ならずとも「素人が捜査に首を突っ込むな！」と言いたいところだが、シャーロック・ホームズ気取り(?)のユイ探偵はそれに耳を貸さず、あくまで我が道を・・・。

そんなユイ探偵が、ある日入手した野次馬男からの聞き込み情報とは・・・?

■□■両作とも靴に注目！一方はスケート靴、本作は？■□■

『薄氷の殺人』はスケート場とスケート靴が印象的で、まさに『薄氷の殺人』という邦題がピッタリの映画だった。また、映画の暗さとは正反対の『白日焰火』という原題も、ラストにみる「白昼の花火」のシーンを見ると、十分納得できるものだった。同作では、刑事たちがスケート靴を持ち歩く男を容疑者として追及していたが、本作では、工場の出口で“張り込み”をしていたユイとリウが怪しい男を発見し、これを追跡する中盤に1つの山場が訪れる。工場内や操車場内での追っかけっこは今時のハリウッドのスピーディな追跡劇に比べるといかにも原始的(?)だが、それがかえって迫力を増しているから面白い。

容疑者の反撃によって、リウは電線で感電した挙句、地上に落下。ユイも背後から首を絞められたが、あわやのところで反撃し、容疑者を撃退。容疑者は片方の靴をもぎ取られたまま逃走することに。以降ユイはその片方の靴の合う男を犯人だと決めつけていくが、そんな非科学的な捜査でホントに大丈夫・・・?

他方、悔しい思いのままユイは頭を打って動けないリウを車に乗せて病院に運んだが、途中でリウの会話が途切れてしまったからアレレ。さらに、やっと診察してもらった医者から「脳内出血の治療が手遅れだった。もう少し早く運び込んでいれば・・・」と言われたから、ユイは愕然とすることに。“俺が犯人を追うことにあれ以上夢中にならず、先にリウを病院に連れて行っていけば・・・”というわけだが・・・。

■□■ユイ探偵の捜査(?)の進展は？■□■

こんな風にユイはシャーロック・ホームズ張りの名探偵気取りで捜査を続けていたが、どうもユイは何かと身勝手な男らしい。すると、製鋼所で毎年行われている工員の表彰式で、模範工員として表彰されたユイは、感動的なスピーチで工員たちから大きな拍手を浴びたが、それってホントに支持されているの?また、被害者の女性が通っていたという怪しい工員広場に夜な夜な人が集まり、ダンスに興じていたが、そこで出会った美しい女性イェンズ(ジャン・イーイェン)とユイは何となく恋人同士になっていったが、イェンズのホントの気持ちはどうなの?

他方、ユイの中途半端な捜査(?)とは別に、ジャン警部とリー刑事も本格的な捜査(?)を進めていたが、なかなか犯人を検挙できないもどかしさと降り続ける雨を2人の刑事は

憂えていた。そんな中、5人目の女性の死体が発見されたが、これは単なる夫婦ゲンカのもつれを原因とする夫による妻殺らしいから、捜査中の連続殺人事件の犯人とは違うことが明らかだ。

日本では2018年に異常気象が相次いだが、1997年に起きたこの連続殺人事件当時、中国南部では異常気象が続き、記録的な寒波が到来したらしい。スクリーン上で連日降り続ける雨を見ているだけでもうっとうしいのだから、そこに寒波が加われば、連続殺人事件の捜査がより困難になり、陰鬱になることは明らかだ。しかして今、ジャン警部、リー刑事の捜査と同じように、ユイ探偵の捜査も暗礁に乗り上げようとしていたが……。

■□■この男と女の恋模様(?)は異色な展開に! ■□■

『薄氷の殺人』では『藍色夏恋』(02年)、『シネマ5』379頁)でデビューした台湾生まれの美人女優桂綸鎂(グイ・ルンメイ)が魔性の女(?)を演じ、本作と同じように殺人犯を追うことにとりつかれた主人公ジャンとの、スケート場を中心とする淡い恋模様(?)を展開していた。それに対して、本作でヒロインのイェンズ役を演じるのは、1983年生まれ歌手兼女優のジャン・イーイェン。彼女は陸川(ルー・チューアン)監督の問題提起作『南京!南京!』(09年)で娼婦役を演じていたから、私も強く印象に残っている美人女優だ。イェンズはユイがはじめて“工員広場”に行った時、ユイに対して“怪しい男”の情報提供をした女だが、本作では連続殺人事件の探偵と情報提供者の女がどのような男女関係になっていくのかに注目したい。

自分に近寄ってくる男を見れば、女は誰でも自分に好意を持っていると感じるのは当然。イェンズもそうだったようで、デート(?)のたびに彼女はいろいろ話をしようとするのだが、ユイは寡黙だから、一体何を考えているのかサッパリわからない。しかし、スクリーン上をみていると、ユイはイェンズとのデートを楽しむより、イェンズから連続殺人事件についての情報を得ることに重点を置いているようだからアレレ……。しかして、ある日イェンズの部屋の中に飾ってあった昔の写真を見ていたユイは、それが被害者女性たちの容姿に似ていることに気づいたから、ひょっとして次の標的はイェンズになるかも……。?そう考えたユイはイェンズに美容院の店を借りてやり、そこで仕事をさせ始めたが、これはイェンズへの好意から?それとも、犯人をこの店におびき出すための策略……。?

今ドキの若者向けの邦画では男女の恋模様の描き方はどれも単純明快だが、本作のそれは異色だから、しっかりこの2人の恋模様(?)の展開を見定めたい。向かいの喫茶店に張り込み、美容院に“犯人”がやってくるのを目撃したユイは、「してやったり!」とばかりにその男を捕え、あの片方の靴をはかせたが、その結果は……。?他方、そんなユイの動きを見たイェンズの恋心の変化は……。?

■タイトルの意味をしっかりと考えよう■

本作の原題は『暴雪将至』。これは「暴雪が今にもやってくる」という意味だから、英題の『The Looming Storm』も、邦題の『迫り来る嵐』もそれを直訳したことになる。前日に観たハリウッド映画『ワイルド・ストーム』(18年)は、史上最大規模、カテゴリー5のハリケーンがアメリカの西海岸を襲う中での5億ドルの旧紙幣の強奪作戦を描いたエンタメ作品で、そこではハリケーンの暴風雨そのものが1つの主役になっていたから、『ワイルド・ストーム』というタイトルがいかにピッタリの映画だった。しかし、本作では雨のシーンは多いものの暴雪のシーンは全く見られず、ラストに1997年に中国南部を襲った記録的な寒波とそれによる被害がテロップで流れるだけだ。しかるに、なぜドン・ユエ監督は本作のタイトルを『暴雪将至』としたの？

それには、前述したドン・ユエ監督の公式インタビューを考える必要がある。つまり、ドン・ユエ監督は中国が大きく変化した1990年代に起きた連続殺人事件を回顧する中で、90年代からゼロ年代にかけての中国の“変化”を描きたかったわけだ。ちなみに、今でもクリスマスの定番ソングになったいる、山下達郎の「クリスマス・イブ」の最初の歌詞は「雨は夜更けすぎに雪へと変わるだろう」だが、夜が更けて寒くなっていけば、今降っている雨が雪に変わっていくのは当然。すると、本作のスクリーン上で大量に降っていた雨も、中国が変化していく中で雪に変わっていくの・・・？しかも暴雪に・・・？

1997年は香港が中国に返還されたことによって、中国全土が歓声に包まれるとともに“一国二制度”が始まった年。しかし、それから20年を経た今、香港の自由と民主主義は？中国の人権状況は？そんなところまで考えるのは深読みすぎるかもしれないが、本作ではストーリーのみならず『暴雪将至』という原題についてもしっかりと考えたい。

2019(平成31)年1月21日記